



十一 うんこ大王登場

僕は山盛りのお腹を抱えたまま、ソファーに寝転がった。近くに転がっているマンガを手にする。

「あれ。おかしいぞ」僕はお腹をさわる。そして、少し顔がゆがむ。

「どうしたんだい？」王子が胸ポケットから心配そうに顔を出した。

「ちょっと、お腹が痛いんだ」

「大丈夫かい」僕の顔に合わせて、王子の顔も歪んでいる。

「大丈夫だよ」と言いながら、苦しくて、体がくの字になった。

もうだめだ。僕はソファーからゆるゆると起き上がると、背中が曲がったおじいさんのように、トイレに駆け込んだ。

ドアを開け、ズボンと一緒にパンツを下ろし、座りこむ。おしりからお腹に溜まっていた物が一気に吹き出した。と、同時に、お腹はぺちゃんこになった。

「ふう」後から、ため息が出た。

「少しは楽になったかい」王子が僕の顔を流れた冷や汗を拭ってくれた。

「ああ、ありがとう」

「だから、食べ過ぎはよくないと言っただろう。あれだけの量を食べたんだもの。大王や隊員たちが心配だな」王子の顔が曇った。

その時。

「ひゃひゃひゃあーん」

トイレのたまり水から何かが飛びだした。

「あっ。うんこ大王だ」

「大王」

僕と王子が同時に声を上げた。

「食べ過ぎると、こうなるんだ。わかったか。おかげで、わしらの軍団の隊員たちは、食べ物の消化で忙しすぎて、疲労困憊で全員寝込んでしまったぞ」

確かに、目の前の大王の体はふらふらで、立っているのが精いっぱいのようなのだ。しかも、茶色い顔は赤く染まっていた。怒っているのだ。

「それに、王子。お前は主と一緒にいたのに、主に食べ過ぎを止めることができなかったのか」大王の怒りの矛先は王子に向いた。

「注意はしたんですけど・・・」王子は頭をうなだれた。

「まあ、今回はしょうがない。次からは、気をつけるんだぞ。さっきも言ったように、お前だけの体じゃないんだからな」

「はい」僕は素直に頷いた。

「じゃあ、わしは帰る。王子、お前も一緒だ」

「はい」王子は僕の胸ポケットから飛び出すと、便器の中にぽっちゃんとした。

「それじゃあな。流してくれ」

「また、学校と一緒にいこうよ」王子が明るい声を出した。

「王子。今度は、勝手にいくなよ。わしに報告してから行くんだぞ。いや、待て。今度はわしが行く。わしも外の世界を見たいからな」

「大王が行くんですか。それじゃあ、消化活動の指揮は誰がとるんですか」

「王子。お前がやればいい。お前もそろそろ、わしの代わりができるはずだ」

大王と王子の親子の会話が続く。

「主よ。今度は、わしがお前と一緒にいこうからな。それまで、期待して待っていてくれ」

「じゃあね。今日は楽しかったよ」王子が手を振った。

「僕も楽しかったよ」手を振り返す。

「今度は、わしの番だからな」大王が念を押した。

僕は水洗レバーを回した。便器の中の水は渦を巻き、大王と王子は回転しながら消えていった

。

「今度は大王と一緒にか・・・」

僕は胸ポケットから大王が顔を出している姿を想像した。ひい。とんでもない。

「おい、ハヤテ。いつまでトイレに入っているんだ。早く代わってくれ」パパの声だ。

僕がドアを開けると、パパがトイレに飛び込んだ。

「ちょっと、食べすぎたみたいだ」

僕がリビングルームに戻ると

「ほんと、パパもハヤテも親子ね。同じように、食べ過ぎるんだから」

ママが眉毛をV字にしてあきれ返っていた。